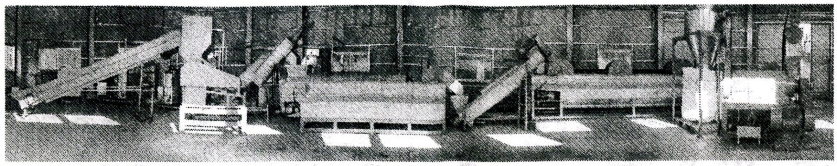
廃プラ破砕洗浄脱水ライン導入

三功

軟質系フィルムを再資源化へ

登録再生利用事業者の三功（三重県津市、片野功之輔社長、☎059・255・5597）は、生ごみたい肥化施設がある第1リサイクルセンターに新たに「廃プラ破砕・洗浄・脱水ライン」を導入した。



廃プラ破砕・洗浄・脱水ライン

これまで、スーパーなど事業所から排出される期限切れの容器包装詰め食品の中身はたい肥化できても、容器包装は焼却処分されてきた。同ラインを導入したことで、使用済み食品容器や軟質系フィルムなど汚れた廃プラスチックのリサイクルが可能となる。

処理工程は、廃プラを湿式破砕機で粗破砕した後、1軸スクリュー洗浄機で約40度Cの温水でもみ洗う。これによって調味料や油分、魚肉類の血液など脂分を除去する。次に、水車状のかく拌装置の付いた洗浄槽ですすぎ、汚れを完全に取り除く。強力な横式脱水機で脱水した後、フレコンパックへと送る。

同社は、現在、これらを代替燃料として製紙工場へ販売しているが、再生工場で新たなプラスチック製品にリサイクルすることも可能。

中身の食品は、たい肥化して地元農家や一般に販売し、農家が栽培した野菜は、再び排出元のスーパーで販売されている。

今後、中身入り容器以外でスーパーや食品工場から発生する廃プラのマテリアルリサイクルも視野に入れているが、ポリプロピレン（PP）、ポリエチレン（PE）などが混合した状態で排出されており、これらの分別を徹底させることで、PPバンドやビニール袋にリサイクルすることができる。こういった現状を踏まえ、排出元へ分別の細分化を呼び掛けている。

同社の片野宣之取締役専務は「スーパーの保管庫には軟質系フィルムなど廃プラが大量に排出されており、そのほとんどが焼却されている。これを何とかしたいと思っていた。徹底した分別によって、それらをビニール袋やPPバンドなどにリサイクルし、顧客に還元していきたい」と話す。

同社は、リサイクル率を向上することで、コストダウンを図り、取引先が支払う処理費用の低減化目指す。さらに、新たな食品工場にも営業展開を図っていく方針だ。